室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

サモア語、タヒチ語、ハワイ語における接語と接辞の区分について
ーサモア語・タヒチ語の接語eとハワイ語の接辞‘eー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2019-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): Samoan, Tahitian, Hawaiian, clitics, affixes, numerals 作成者: 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009819

室工大紀要第 68 号（2019）69～81

学　術　論　文

サモア語、タヒチ語、ハワイ語における接語と接辞の区分について -サモア語・タヒチ語の接語 e とハワイ語の接辞‘e-

塩谷　亨*1

Distinction between Clitics and Affixes in Samoan, Tahitian and Hawaiian -Samoan/Tahitian Clitic *e* and Hawaiian Affix *‘e* -

Toru SHIONOYA

（原稿受付日　平成 30 年 7 月 9 日　　論文受理日　平成 31 年 2 月 1 日）

Abstract

Numerals, in Samoan, Tahitian and Hawaiian, are often preceded by *e* or *ʻe*, which can be classified either as a clitic or as an affix. However, the distinction between clitics and affixes is not always clear-cut but a matter of degree. In this paper, the usages of Samoan *e*, Tahitian *e* and Hawaiian *ʻe* are examined to show the similarities and differences among them. The Samoan *e* showed the highest independency as a morpheme and was considered the most clitic-like. On the other hand, the Hawaiian *ʻe* showed the lowest independency and was considered the most affix-like. Tahitian *e* was situated between them.

Keywords : Samoan，Tahitian，Hawaiian, clitics, affixes, numerals

1　はじめに

1. 1　本稿の概要

ポリネシア諸語とは地理的な区分としてのポリネシア地域（ハワイ諸島、ニュージーランド、イース

*1　ひと文化系領域

ター島を結ぶ三角形の中）及び、メラネシア地域とミクロネシア地域の一部で話されている起源を同じくする同系言語グループである。お互いに文法的及び語彙的にかなり類似しているため、ポリネシア諸語の欧米人による本格的な記述が始まった 19 世紀には、ポリネシア諸語はポリネシア諸方言と称され（Hale, 1838-1842）、一つの言語の諸方言であるとみなされていた。しかしながら、その後、記述研究が進み、お互いの様々な相違点が明らかになり、多くは独立した言語であると見なされ、今回取り上げるサモア語、タヒチ語、ハワイ語もそれぞれ独立した言語として扱われている（Pawley, 1967; Biggs, 1971）。また、政治的にも、これらの三言語は、サモア、仏領ポリネシア、米国ハワイ州それぞれの公用語として制定されており、名実共に独立した言語とみなされている。

今回の分析対象としたサモア語、タヒチ語、ハワイ語はいずれもポリネシア諸語に属する言語であり、そのうち、サモア語はサモア・域外ポリネシア諸語、タヒチ語とハワイ語は東部ポリネシア諸語という下位区分に属する。更に東部ポリネシア諸語の中でも、タヒチ語はタヒチ語群、ハワイ語はマルケサス語群という下位区分に属する。また、類型論的分類においては、三言語とも、VSO を基本語順とし、若干の接辞は持つものの概ね孤立語的特徴を持つという点で共通である。

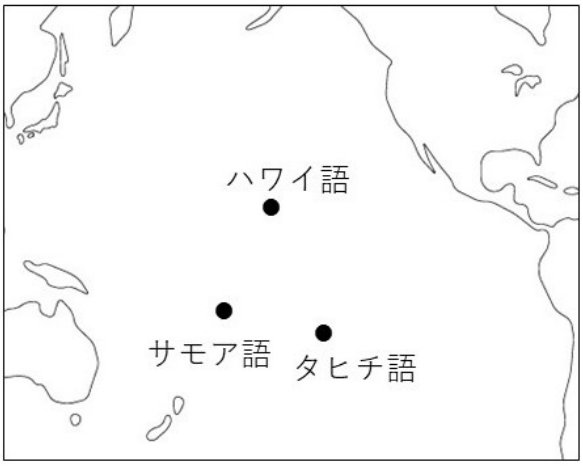

図 1　ハワイ語、サモア語、タヒチ語の位置関係概略図

本稿は、科学研究費補助金・基盤研究（C）「ポリネシア諸語における語類の推移と曖昧性に関する対照研究」（17K02709）の初年度の研究成果の一部である。ポリネシア諸語の形態素の分類基準についてサモア語、タヒチ語、ハワイ語の事例に基づいて考察するとともに、これらの言語間で、機能的・構造的に対応する形態素（文中での機能及び分布が対応している形態素）がどのように分類されるかについて不一致が起こっている事例の一つとして、数詞述語文の文頭に現れる形態素 e（サモア語・タヒチ語）及び‘e（ハワイ語）について分析した。尚、記号‘は声門閉鎖音を表す。

今回の分析データとしては、物語、歴史、法律、文化、新聞等の様々なジャンルの文献から得られた用例を主たるソースとし、補足的に、先行研究である、辞書や記述文法からの例文も引用した。ハワイ語については自然な環境でハワイ語を継承したネイティブスピーカーへのアクセスが困難な状況にあり、直接の調査ができないため、他の言語についてもそれに揃えて文字言語データを用いた。また、今回は、形態素の分類の上で、その独立性が重要な基準となるため、文字としてどのように表記するか（正書法）、すなわち、ある特定の形態素が分かち書きにされているのか、それとも、他の形態素と結合して、分かち書きせずに、書かれているのかについても、傍証として考慮に入れるべき要素と考えられる。その意味でも、文字言語データが重要となる。

1.2　サモア語・タヒチ語の e とハワイ語の‘e

他の多くのポリネシア諸語と同様、サモア語とタヒチ語とハワイ語では、基本的に、述語は文頭に現れ、＜述語―主語―その他＞のような語順になる。述語部分には動詞句や名詞句（前置詞が付加された

場合は、前置詞も含めて名詞句と呼ぶ）が現れるが、述語部分のみ、例えば、動詞句のみ、あるいは名詞句のみから成る文も用いられる。動詞句や名詞句以外に、数詞が導く句も、文頭、すなわち述語の位置に来ることがある。このような数詞述語文の中でもよく見られるのが次のような構造を持つ文である。

<e/‘e　数詞(X)　名詞(Y)　修飾語句(Z)　>
(1)(S) e　tolu　aso　sa　i ai　pea　Salamasina i　Fagaloa
<一般>　3　日　<過去>　在る　<継続> Salamasina <位置> Fagaloa
「Salamasina は Fagaloa に三日間居続けた。」
（文字通りには「Salamasina が Fagaloa に居続けた日は３ある。」）Henry (1980:79)
(2)(T) e　toru　pahi　i　reva
<数詞> 3　船　<完了>　出発する
「3 隻の船が出発した。」
（文字通りには「出発した 3 隻の船がある。」Lazard and Peltzer (2000:47)
(3)(H) ‘ekolu　la　i　hala　i　ko lakou　noho　ana
<数詞>－3　日　<完了>　過ぎる　<位置>　彼らの　滞在する　<動名詞>
i　Kohala
<位置> Kohala
「彼らが Kohala に滞在している際に、3 日が過ぎた。」
（文字通りには「彼らが Kohala に滞在している際に過ぎた 3 日がある。」Fornander (1916-1917:505）

いずれも、上記のように、＜e/‘e 数詞(X)　名詞(Y)　修飾語句(Z)＞いう構造で、「Z な Y が X 個ある」という意味を表すという点で共通である。上述のように修飾語句を伴って用いるのが一般的であるが、修飾語句を伴わない用例もある。

<e/‘e 数詞(X)　名詞(Y)>
(4)(S)　e　lua　pū
<一般>　2　穴
「穴が二つある。」Steubel and Herman (1978:71)
(5)(T)　e　piti　rāve‘a
<数詞>　2　方法
「方法が二つある。」　Manu-Tahi (2005:94)
(6)(H)　‘e-　kolu　‘Ole
<数詞>－3　‘Ole の夜
「‘Ole の夜（ハワイの陰暦で第 7 夜、第 8 夜、第 9 夜を‘Ole の夜と呼ぶ）が三つある。」
Fornander (1916-1917:201)

このように修飾語句を伴わない場合には、＜e/‘e 数詞(X)　名詞(Y)＞いう構造で、「Y が X 個ある」の意味を表す。例文が示すように、これらの言語の数詞述語文は同一の構造を持ち、意味も対応しているという点では一致している。また、いずれの言語でも、e/‘e には主強勢が来ない（いずれの例でも主強勢は常に数詞内）という点でも共通である。

しかしながら、サモア語・タヒチ語の二つとハワイ語の間には二つの不一致が見られる。第一は、現在の正書法ではサモア語とタヒチ語の e が分かち書きされるのに対し、ハワイ語の‘e は常に数詞に結合して（分かち書きせずに）書かれることである。また、第二は、文頭に現れる形態素がサモア語とタヒチ語で e であるのに対し、ハワイ語では‘e と、若干異なっている点である。

1.3　先行研究における形態素の分類の不一致

上述の分かち書きにおける言語間の不一致については、先行研究における、形態素 e/‘e の扱いの違いと関係している。

表 1　先行研究における数詞述語文の文頭形態素の扱い

サモア語 e	動詞に付加される小辞 (Churchward, 1951; Shionoya, 1990; Mosel & Hovdhougen, 1992)	数詞に付加される小辞 (Milner, 1966; Oda, 1976)　{(Oda,1976)では冠詞の一種として分析されている。}
タヒチ語 e	副詞・形容詞に付加される接頭辞（Davies, 1851）	数詞に付加される小辞　(Académie Tahitienne, 1986; Wahlroos, 2002)
ハワイ語 ‘e		数詞に付加される接頭辞 (Andrews 1854; Elbert and Pukui, 1979)

このように、タヒチ語の古い記述とハワイ語の記述では接頭辞、すなわち単語の一部として分かち書きされない形態素として分析されているのに対して、タヒチ語の新しい記述とサモア語の記述では小辞、すなわち、分かち書きされるべき別の語として記述されている。また、ハワイ語では数詞に付加される形態素として記述されているのに対し、サモア語とタヒチ語では、数詞に付加される形態素としての記述以外に、動詞や副詞・形容詞など数詞以外の語類に付加される形態素としての記述が存在する。

尚、最近のサモア語の文法記述においては、数詞述語の前に付加される e は一般時制（時制に関わらず一般的に物事を述べる）と分析されているので(Mosel and Hovdhaugen, 1992)、本稿でもその分析を採用する。一般時制の指標 e は例(7)のように、様々な動詞に付加されて用いられる。これ以降、グロスには<一般>のように表記する。

(7) e　　mālosi le　　tama
　<一般>　強い　<定冠詞>　子供
　「子供は(生来)強い。」Milner (1966 :39)

例(7)で、動詞 mālosi に一般時制の指標 e が付加されている。

1. 4　本稿の目的

本稿の目的は二つある。本稿の主たる目的は、1.2 節でみたような表面的には極めて類似した現れ方をするサモア語・タヒチ語の e とハワイ語の‘e の現れ方の詳細を比較し、その違いを明らかにすることである。第 2 節では、付加される数詞の範囲、専ら数詞に付加されて用いられる他の形態素との共起或いは交替、数詞以外の語類にも付加される他の形態素との共起或いは交替、という三つの着眼点から比較した上で、現れ方の違いについて考察する。

また、もう一つの目的として、第 2 節で明らかにされるサモア語・タヒチ語の e とハワイ語の‘e の現れ方の違いに基づき、3.1 節では、サモア語・タヒチ語の e とハワイ語の‘e はそれぞれ、どの形態素の分類の中に含めるべきなのか考察する。前節の表 1 で見たように、先行研究においては、はサモア語・タヒチ語の e とハワイ語の‘e は、形態素の分類としては、小辞か接辞のいずれかとして記述されている。このうち、小辞という分類についてであるが、これらのポリネシア諸語の先行研究においては、小辞と接語の区別が明確になされてこなかった。サモア語、タヒチ語、ハワイ語等のポリネシア諸語を下位区分として含むオーストロネシア語族全般における小辞と接語及び接辞を区分する基準として、小辞には主強勢が来ることができるが、接語及び接辞には主強勢が来ることができないということが示されている（Blust, 2013）。この基準に従えば、1.2 節で述べた様にサモア語・タヒチ語の e もハワイ語の‘e も、主強勢が来ることはない（主強勢は常に数詞に来る）ということから、サモア語・タヒチ語の e もハワイ

語の‘e も小辞ではなく、接語又は接辞のいずれかであるということになる。従って、具体的には、サモア語・タヒチ語の e とハワイ語の‘e はそれぞれ接語と接辞のどちらとみなすべきなのか考察することとなる。また、接語と接辞の区別としては、形態統語論的に独立したものが接語で、形態統語論的に独立していないものが接辞であるとされている（Blust, 2013）。この点に関連して、本稿では、サモア語とタヒチ語とハワイ語において何をもって形態統語論的に独立しているとみなすのか、その基準についても考察することになる。

2　サモア語・タヒチ語の e とハワイ語の‘e の現れ方の比較

2. 1　付加される数詞の範囲

「1」を表す数詞については、サモア語では数詞の前に e が付加される(例 8)が、タヒチ語とハワイ語では e や‘e は付加されない(例 9、10)。

(8)(S) e　tasi　lona　nifo umi　ma　le　maai,
<一般> 1　彼の 牙　長い と共に　<定冠詞> 鋭い
「彼の長くて鋭い牙は一本。」Steubel and Herman (1978:59)
(9)(T) ho‘ē vahine i　te　pō .
1　女性 <位置> <定冠詞> 夜
「夜に女性は 1 人いる。」Manu-tahi (2005:112)
(10)(H) ho‘okahi　la　i　koe
1　日 <完了> 残る
「残り一日ある。」（文字通りには「残った一日がある。」）Fornander (1916-1917:127)

「2～9」という数量を表す数詞には、三言語全てについて e や‘e が付加される。以下、例として、「2」を表す数詞に付く場合(例 11,12,13)と「9」を表す数詞に付く場合(例 14,15,16)を示す。

(11)(S) e　lua faavae　na　filifilia ai　lea　tamaita'i
<一般> 2　根拠　<過去> 選ぶ　<照応>　この　女性
「（それによって）この女性が選ばれた根拠は二つである。」Henry (1980:52)
(12)(T) e　piti huru　tō‘ere
<数詞>　2　種類 太鼓
「2 種類の太鼓がある。」Musée de Tahiti et des îles (2002:30)
(13)(H) ‘e-lua　mau　wahine i　laila
<数詞>-2 <複数> 女性　<位置> そこ
「そこに女性が 2 人いる。」Kahiolo (1978:83)
(14)(S) e　iva faailoga ua　fuafuaina.
<一般> 9　賞　完了 計画する
「計画した賞は 9 つだ。」Samoa Observer (2016 年 4 月 2 日)
(15)(T) e　iva matahiti ti‘aturiraa, hepoheporaa, e　ti‘aturi-faahou-raa.
<数詞> 9　年　希望　絶望　そして 再びの希望
「希望、絶望、そして新しい希望の 9 年があった。」Saura (1997:404)
(16)(H) ‘e-iwa　no　kanaha la
<数詞>-9 <強調> 40　日
「9 つの 40 日がある。」 Malo (1987:24)

「10」や「100」など、大きな数量を表す数詞に付いては、サモア語では数詞の前に e が付加される(例

17)が、タヒチ語とハワイ語では e や‘e は付加されない(例 18、19)。

(17)(S) e　　sefulu ana　usuga
　　<一般> 10　　彼の　結婚
　　「彼の結婚は 10 回だ。」Henry (1980:100)
(18)(T) ho‘ē ahuru ma vau irava Ture
　　1　　10　　と　8　章　法
　　「法の 18 の章がある。」Daubard and Millaud (2000:42)
(19)(H) he　　umi mau　la　e　　kapu　　ai
　　<不定冠詞> 10 <複数>　日　<未完了>　神聖である　<照応>
　　「(その期間において）神聖である 10 日がある。」Malo (1987:105)

例(17)のようにサモア語では「10」を表す数詞の前に e が付加されているが、タヒチ語とハワイ語では e や‘e は付加されない。例 (18)のタヒチ語の例では、「10」を表す数詞 ahuru の前に「1」を表す数詞 ho‘ē が付加され、「10 が 1 つ（＝10）」のように表されている。またハワイ語の例(19)では「10」を表す数詞の前には不定冠詞 he が付加され、数詞 umi「10」は名詞のように扱われている。次に、「100」を表す数詞の例を示す。

(20)(S) e　　selau gafa ‘o　　le　　tasi　　itū
　　<一般> 100　尋　<トピック><定冠詞>　一方の　<側>
　　「一方の側は 100 尋だ。」Krämer (1994:219)
(21)(T) ho‘ē hānere mero
　　1　　100　　メンバー
　　「100 人のメンバーがいる。」Manu-Tahi (2005:131)
(22)(H) i　　kekahi manawa he　　haneri　no　　lakou　ma　　kahi　hookahi
　　<位置>ある　時　　<不定冠詞> 100　　<強調>　彼等　<位置>　場所　一つの
　　「ある時には、一か所に彼らは 100 人だ。」Mookini (1984:5)

例(20)のサモア語では e が付加されているが、タヒチ語及びハワイ語では付加されていない。例(18)と同様に、タヒチ語の例(21)では、「100」を表す数詞 hānere の前に「1」を表す数詞 ho‘ē が付加され、「100 が 1 つ（＝100）」のように表されている。またハワイ語の例(22)では、例(19)と同様に、「100」を表す数詞の前には不定冠詞 he が付加され、数詞 haneri「100」は名詞のように扱われている。

　また、数詞ではないが、数量の疑問詞 fia～hia「いくつ」についても、三言語全てにおいて e や‘e が付加される（例 23, 24, 25）。

(23)(S) e　　fia　　tusi?
　　<一般>　いくつ　本
　　「本は何冊か。」Hunkin (2009:43)
(24)(T) e　　hia　　to oe　　matahiti i　　te　　reira　tama'i 1914-18?
　　<数詞>いくつ　あなたの　歳　　<位置> <定冠詞>　あの　戦い
　　「1914-18 のあの戦いの時あなたの歳はいくつか。」Saura (1997:142)
(25)(H) ‘e-hia　　au　　i’a?
　　<数詞>-いくつ　あなたの　魚
　　「あなたの魚は何匹ある。」Nakuina (1902:16)

2. 2　専ら数詞に付加されて用いられる他の形態素との共起或いは交替

三つの言語いずれにも、専ら数詞に付加されて用いられる形態素が存在する。その代表的なものが、数詞が人の数を表していることを示す形態素 to‘a～to‘o である。サモア語では、接頭辞 to‘a が数詞に結合され、更にその前に一般時制指標の e が付加される（例 26)。両者は共起する関係にあり、かつ to‘a が e と数詞の間に入り込み、結果として e と数詞は分離されることになる。一方、タヒチ語では、数詞の前に to‘o が付加される時、e は現れない（例 27)。すなわち、e と to‘o は共起ではなく交替の関係にある。ハワイ語では、数詞が人の数を表していることを示す形態素は現在は用いられておらず、ko‘olua「伴侶」という単語の中にその名残を残すのみである。

(26)(S) e to‘a-tolu teine oloo tutū i ona luma
<一般> <人>-3 娘 <進行> 立つ<位置> 彼の 前
「彼の前に立っている娘が 3 人いる。」Henry (1980:120)
(27)(T) to‘o pae tamarii tei faaea mai
<人> 5 子供 <関係詞> 休む <接近>
「休んでいる子供が 5 人いる。」Lazard and Peltzer (2000:182)

もう一つ、サモア語とタヒチ語においては、「～ずつ（配分）」を表す時、ta‘i という形態素が数詞に付加される。サモア語では、接頭辞 ta‘i が数詞に結合され、更にその前に一般時制指標の e が付加される（例 28)。両者は共起する関係にあり、かつ、to‘a の場合と同様に、ta‘i は e と数詞の間に入り込み、結果として、e と数詞は分離される。一方、タヒチ語では、数詞の前に ta‘i が付加される時、e は現れない（例 29)。すなわち、e と ta‘i は共起ではなく交替の関係にある。これは、前述の、人の数を表していることを示す形態素の場合と同様である。ハワイ語には対応するものはない。

(28)(S) e ta‘i-fa faitotoa i le fale e tasi.
<一般><配分>-4 入口 <位置> <定冠詞> 家 <一般> 1
「一つの家に 4 つずつ入り口がある。」Steubel and Herman (1987:48)
(29)(T) ta‘i maha tamari‘i i te vaa hoe
<配分> 4 子供 <位置> <定冠詞> 船 1
「一隻の船に子供が 4 人ずついる。」Lazard and Peltzer (2000:182)

ハワイ語では、累積（だんだん増えてきてこの数に至った）を表す時に、‘a という形態素が数詞に付加される。ポリネシア諸語比較辞典（Greenhil at al. 2010）によると、この形態素は、タヒチ語とハワイ語の祖先の言語がサモア語から分岐した後で生じた形とされており、従って、サモア語には存在しない。

(30)(H) ‘o Mumu ka mua, ‘o Wawa, ‘o Ahewahewa, ‘o Lulukaina,
<同定> Mumu <定冠詞> 最初 <人名> Wawa <人名> Ahewahewa <人名> Lulukaina
‘o Kalino, ‘a-lima kane
<定冠詞> Kalino <累積>-5 男
「最初は Mumu で、Wawa、Ahewahewa、Lulukaina、Kalino で、男 5 人になる。」
Fornander (1916-1917:561)

例(30)では、Mumu から始まって、一人ずつ増えていき、最後 Kalino で、累積合計 5 人に至った、という意味を表している。数詞の前に‘a が付加される時、‘e は現れない。前節までで見てきたように、一般的にものの数を表す時には‘e が用いられ、累積の意味を示す時には‘a が用いられる。両者は共起ではなく交替の関係にある。また、このハワイ語の‘a は 2～9 を表す数詞にしか付加されない。タヒチ語においても、ハワイ語と同形の‘a という形態素を用いた同様の表現がある。

(31)(T)　‘a　　pae matahiti au　　i　　Tahiti nei
　　<累積>　5　年　　私　　～に タヒチ この
　　「私はこのタヒチでこれで 5 年になる。」Lazard and Peltzer (2000:41)

一般的にものの数を表す時には e がもちいられるが、累積の意味を示す時は‘a が用いられる。両者は共起ではなく交替の関係にある。ハワイ語と同様である。

2. 3　数詞以外の語類にも付加される他の形態素との共起或いは交替

サモア語とタヒチ語では e の代わりに、完了を表す形態素が数詞の前に付加されることがある。この完了を表す形態素‘ua は、様々な動詞に付加される（例 32、33）。ハワイ語にも同語源の完了指標 ua が存在する（例 34）。

(32)(S) ‘ua　　alu　‘i　　Tutuila
　　<完了> 行く <目的地> Tutuila
　　「Tutuila に行った。」Moyle (1981:162)
(33)(T) ‘ua　　reva　　te　　pahī
　　<完了> 出発する <定冠詞> 船
　　「船が出発した。」Lazard and Peltzer (2000:41)
(34)(H) ua　　hele ke　　kanaka
　　<完了> 行く<定冠詞> 人
　　「その人は行った。」Elbert and Pukui (1979:59)

完了の指標‘ua が例(32)では動詞 alu「行く」、例(33)では動詞 reva「出発する」、例(34)では動詞 hele「行く」にそれぞれ付加されている。

この完了指標‘ua が、サモア語（例 35）と、タヒチ語（例 36）では、それぞれ、数詞の前に付加されて、数詞が表すような状態に到達した、という意味を表す。この場合、e は現れない、すなわち、e が完了指標‘ua と交替する。

(35)(S) ‘ua　　tolu tama.
　　<完了> 3　　子供
　　「子供が 3 人になった。」　Moyle (1981:220)
(36)(T) ‘ua　　piti matahiti au i　　Huahine
　　<完了> 2　年　　私 ～に　Huahine
　　「フアヒネ島で私は 2 年になった。」Académie tahitienne (1986:149)

例(35)では、3 人という状態に到達した、例(36)では、2 年という状態に到達した、という意味をそれぞれ表している。一方、ハワイ語では、‘e が完了指標 ua と交替する例は見つからなかったが、その代わりに、非常に稀な例ではあるが、完了指標 ua が‘e の付加された数詞と共起する例が今回一例のみ見つかった。

(37)(H) 1859-1872, me he la,　ua　　‘e-iwa　kanaka i　　make　malaila
　　~のようだ <完了> <数詞>-9 人　　<完了> 死ぬ そこで
　　me　　ke　　akaka　　ole　　o　　ke　　kumu
　　と共に<定冠詞> 明らかな<否定> の <定冠詞> 理由
　　「1859-1872 年、理由が明らかでなくそこで死んだ人は 9 人だったようである。」
　　Fornander (1918-1919:543)

例(37)では、数詞 iwa「9」に‘e が付加された上で、その前に完了指標 ua が付加されている。すなわち、‘e が完了指標 ua と交替ではなく、共起している。この場合、‘e は完了指標 ua より外側、すなわち、数詞と直結したままで、‘e と数詞の間には他の要素は入り込んでいない。いずれにしても、今回、わずか一例しか見つかっていないため数詞の前に付く‘e と完了指標 ua の共起がどこまで一般的なのか疑問の余地は残る。

2.4 まとめ

以上の比較の結果は次の表 2 のようにまとめられる。

表 2　サモア語・タヒチ語の e とハワイ語の‘e の現れ方の比較まとめ

<table>
<tr><td></td><td colspan="4">共起する数詞の範囲</td><td colspan="3">専ら数詞に付加される形態素と</td><td>他の語類にも付加される形態素と</td></tr>
<tr><td></td><td>1</td><td>2~9</td><td>10, 100</td><td>幾つ</td><td>to‘o/to‘a
人</td><td>ta‘i
配分</td><td>‘a
累積</td><td>‘ua/ua 完了指標
（動詞全般と共起）</td></tr>
<tr><td>サモア語 e</td><td>可</td><td rowspan="3">可</td><td>可</td><td rowspan="3">可</td><td colspan="2">共起（e __ 数詞）</td><td>N/A</td><td rowspan="2">交替</td></tr>
<tr><td>タヒチ語 e</td><td rowspan="2">不</td><td rowspan="2">不</td><td colspan="3">交替</td></tr>
<tr><td>ハワイ語‘e</td><td colspan="3">N/A</td><td>交替</td><td>?共起（ __ ‘e-数詞)</td></tr>
</table>

(N/A：対応する形式が存在しないか現在用いられていないために比較に適さず)

このように、2～9 を表す数詞及び疑問詞「いくつ」と共起するという点では、三言語は共通であるが、それ以外について、サモア語とハワイ語は全く共通点を持たず、対照的である。また、タヒチ語は、サモア語とハワイ語の中間に位置していることがわかる。

サモア語の e は、１）全ての数詞と共起するという点で自由度は高く、２）数詞に to‘o や ta‘i が付加される場合にはそれよりも外側に来る、すなわち、e と数詞語根の間に別の形態素が来るという点で数詞との結合は弱く、また、３）動詞全般と共起する完了指標と交替するという点で、専ら数詞に付加される形態素ではなく、より大きな語類である動詞に付加される形態素群の一部ととらえられる。従って、数詞への依存度は低く形態素としての独立性が高いと言える。

一方、ハワイ語の‘e は、１）限られた数の数詞としか共起しないという点で自由度は低く、２）‘e と数詞の間に他の形態素が入り込むことがないという点で数詞との結合は強く、３）専ら数詞としか共起しない形態素と交替するという点で、‘e 自身も専ら数詞とのみ関連した形態素としてとらえられる。従って、数詞への依存度が高く形態素としての独立性は低いことがわかる。

タヒチ語の e は、１）限られた数の数詞としか共起しない、及び、２）e と数詞の間には他の形態素が入り込むことがない、という二点においてハワイ語と共通であるのに対し、３）動詞全般と共起する完了指標と交替するという点ではサモア語と共通である。従って、形態素の独立性としては、サモア語とハワイ語の中間に位置すると考えられる。

2.5 歴史言語学的な背景

このようなサモア語・タヒチ語の e とハワイ語の‘e の現れ方の違いの要因については、歴史言語学的文献の中である可能性が提示されている。Web 版オーストロネシア諸語比較辞典（Blust and Trussel, 2018）では、ポリネシア諸語の祖先にあたるオセアニア祖語には、数詞接辞 *e が存在し、サモア語など（タヒチ語でも同様）では e という形で継承されたことを示した上で、多くのポリネシア諸語において、数詞の指標である形態素 e が、それと同じ形式を持つ＜述語・存在＞の指標である形態素 e と同一視されたと述べている。また、同じく Web 版のポリネシア諸語比較辞典（Greenhil at al., 2010）でも、同様にポリネシア諸語の祖先にあたるオセアニア諸語における＜非過去＞を表す動詞小辞*(q)e(e)がサモア語、タヒチ語、ハワイ語において e という形で継承されたことを示し、オセアニア祖語にはさらに、それとは別

に類似した形を持つ別の形態素として数詞接辞 *e も存在するということを指摘している。尚、祖語が持っていた形を歴史的に推定して再建した形（再建形）には*を付して表記している。

表 3　オセアニア祖語の段階で生じた二つの形態素の同一化

Blust and Trussel 2018	数詞接辞 e＝ 述語・存在の指標 e
Greenhil at al. 2010	数詞接辞 e＝ 非過去の動詞小辞 e

これら二つの歴史言語学的文献が指摘しているのは、ポリネシア諸語の祖先の段階で、数詞に付加される接頭辞と、それと同様の形式をもった別の形態素（述語・存在の指標或いは非過去を表す動詞小辞）が存在したため、それらが同一視されたという可能性である。Shionoya (1990 : 42)も、サモア語の数詞文の文頭に現れる形態素 e について、元々は数詞接頭辞であったものが、時制を示す動詞小辞 e（小辞と接語を区別していない分析である）と同じ形であったために、再分析され、現在は、数詞接頭辞ではなく時制を示す動詞小辞 e として分析されているという仮説を示している。

元々二つの機能の異なる形態素だったものが、ポリネシア諸語の祖先であるオセアニア祖語の段階で、一つになったということを考えれば、結果として、その二つの形態素の機能を継承した子孫言語の一つの形態素の振る舞いが、中間的な・どっちつかずのものになり、先行研究における分類の判断に揺れが生じたことも納得できる。また、言語によって正書法での分かち書きに差があるのも同様の背景が関連するものと考えられる。数詞の前に付加される e と ‘e の事例は、元々接辞だった形態素と、接辞より独立性の高い別の形態素だったものが同一視されるようになったという意味で、接辞と他の形態素との違いを見る上で貴重な事例といえる。

3　結び

3. 1　接語らしさと接辞らしさの基準

前節の内容から、接語と接辞の基準について改めて検討する。接語と接辞の区別に関わる、文法的な独立性とは明確に線を引けるものではなく程度問題であることが指摘されている（Blust, 2013）。サモア語とハワイ語が対極をなし　タヒチ語がその中間という状況から考えても、クリアカットな基準ではなく、形態素の独立性の高さの程度問題として捉えるのが現実に即していると思われる。接語と接辞の差を形態素の独立性の違いと考えると、形態素としての独立性がより高いもの、今回の場合はサモア語が、より接語らしいもの、そして、独立性の低いもの、今回の場合はハワイ語がより接辞らしいものと考えることができる。表 4 に、今回の比較結果に基づき、接語らしさと接辞らしさの基準と、その中での今回の三言語の位置付けを示す。

表 4　接語らしさと接辞らしさの基準

より接語らしい←――――――――――――――――――→より接辞らしい	
付加される語の範囲が広い	付加される語の範囲が狭い
付加される語との間に別の形態素が来る	付加される語との間に別の形態素が来ない
広い語類に付加される形態素と交替	特定の限られた語類に付加される形態素と交替
サモア語 e←――――――――タヒチ語 e――――――――→ハワイ語‘e	

このような三言語の違いを引き起こしている要因は、2.5 節で述べた歴史言語学的研究で示された仮説により次のように説明することができる。非過去の動詞小辞と数詞接辞という二つの異なる形態素であったものが同じ形式となり、それがサモア語においては完全に同一視されるようになったが、タヒチ語では同一視は部分的にしか進まなかった。一方、ハワイ語においては、非過去の動詞小辞は e という形式で継承されたのに対し数詞接辞はそれと異なる‘e という形式で継承されたため、形式の同一化が起こらず、従って同一視も起こらなかったため、‘e は数詞接辞のままで維持され、元々別の形態素であった

昔の状況を維持していると考えられる。

接語と接辞の区分について言語間、或いは言語内で不一致がみられる例として数詞文に付加される e～‘e について考察した。今回は、語の前に付加される接語的、或いは接辞的形態素についての問題を扱ったが、ポリネシア諸語では、語の後ろに付加される接語的、或いは接辞的な形態素も存在する。今回表 4 で示した基準について、稿を改めて、語の後ろに付加される接語的、或いは接辞的な形態素への適用について扱いたい。

3. 2　残された問題

2.2 節で述べたタヒチ語の‘a については、現在の記述において揺れが見られる。この‘a をハワイ語の‘a と同様に専ら数詞に付加する形態素として分析しているもの（Wahlroos, 2002）と、サモア語の e を一般時制の指標として分析したのと同じように、この‘a も様々な動詞に付加される起動相の指標と同じものであると分析しているもの(Académie tahitienne, 1986)とがある。実は、2.5 節で、ポリネシア諸語の e が祖先言語の段階では二つの異なる形態素であったものが同一視されたという仮説があることを紹介したが、タヒチ語の‘a についても同様の状況がある。ポリネシア諸語比較辞典（Greenhil at al., 2010）によれば、タヒチ語とハワイ語の共通の祖先である東部ポリネシア祖語において、数え上げの数詞接辞*ka(a)という形式と起動相の指標*ka(a)という同形の形式があり、いずれも、タヒチ語においては‘a という形で継承したとされている。元々は異なる二つの形態素であった e がサモア語において同一視されるようになったのと同様のプロセスが、タヒチ語の‘a にも起こっているという可能性がある。

確かに、‘a は起動相の指標として分析できるものの、典型的な起動相として用いられることはむしろ稀であり、その最も一般的な用法は命令である(例 38)。

(38)(T) ‘a　‘āfai　mai　i　te　faraoa
<起動>　与える　<接近> <対格> <定冠詞>　パン
「パンをください。」Lazard and Peltzer (2000:30)

例(38)で、起動相の指標‘a が動詞‘āfai「与える」に付加されて、「ください」という命令を表している。このように、起動相の指標ではあるものの、通常の用法は命令であり、数の累積という意味と乖離しているということ、更に、ハワイ語の‘a と同じように、タヒチ語の‘a も２～９を表す数詞にしか付加されないことから、現時点では、これを起動相の‘a とは別扱いとし、専ら数詞に付加されて累積を表す形態素とした方がよいと考えるが、もしかすると、今後同一視が進むという可能性もあるかもしれない。

謝辞

本研究は科学研究費補助金・基盤研究（C）「ポリネシア諸語における語類の推移と曖昧性に関する対照研究」（17K02709）の初年度の研究成果の一部である。匿名の査読者からたいへん有益なコメントをいただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。

文献

(1) Académie tahitienne, Grammaire de la langue tahitienne, Papeete: Fare Vāna'a, 1986.
(2) Académie tahitienne, Dictionnaire tahitien-français, Papeete: Fare Vāna'a, 1999.
(3) Andrews, Lorrin, Grammar of the Hawaian language, Honolulu: Mission Press, 1854.
(4) Beckwith, Martha W., Kepelino’s Traditions of Hawaii, Honolulu: Bishop Museum Press, 2007.
(5) Biggs, Bruce, The Languages of Polynesia, in Linguistics in Oceania edited by Bowen, J. D., Mouton: The Hague, 1971.
(6) Blust, Robert, The Austronesian languages, revised edition, Canberra: Australian National University, 2013.
(7) Blust, Robert and Trussel, Stephen, The Austronesian Comparative Dictionary, web edition, 2018. {http://www.trussel2.com /acd/ 最終アクセス 2018 年 6 月 20 日}

(8) Chruchward, Spencer, A Samoan Grammar 2nd Edition, Melbourne: Spectator Publishing, 1951.
(9) Cuneo, Taema, Tini, te i‘a i herehia ia Hina, Pirae: Editions Vahine. n.d.
(10) Daubard, Patrick Matarii and Millaud, Hiriata　Histoire et traditions de Huahine & Pora Pora, Papeete : Ministère de la culture de Polynésie française, 2000.
(11) Davies, John, A Tahitian and English dictionary, New York: AMS Pr., 1851.
(12) Elbert, Samuel H. and Pukui, Mary K., Hawaiian Grammar, Honolulu: University of Hawaii Press., 1979.
(13) Fornander, Abraham, Fornander collection of Hawaiian antiquities and folk-lore vol. IV, Honolulu: Bishop Museum Press, 1916-1917.
(14) Fornander, Abraham, Fornander collection of Hawaiian antiquities and folk-lore vol. V, Honolulu: Bishop Museum Press, 1918-1919.
(15) Greenhill, Simon J., Ross Clark, and Bruce Biggs. Polynesian Lexicon Project Online. 2010. {https://pollex.shh.mpg.de/ 最終アクセス　2018 年 7 月 5 日}
(16) Haleole, S. N., Ka mo‘olelo o Laieikawai, Honolulu: First People’s Publication, 1997.
(17) Hale, Horatio, Ethnography and Philology, United States Exploring Expedition, 1838-1842.
(18) Haleole, S. N., Ka Moolelo O Laieikawai, Honolulu: First People’s Productions, 1997.
(19) Henry, Fred, Talafaasolopito o Samoa, Apia: Commercial Printers, 1980.
(20) Hunkin, Galumalemana A. Gagana Sāmoa, revised edition, Honolulu: University of Hawaii Press, 2009.
(21) Kahiolo, G. W., He moolelo no Kamapuaa, Honolulu : Hawaiian Studies Program, University of Hawaii, 1978.
(22) Krämer, Augustin, The Samoa Islands, Honolulu: University of Hawaii Press, 1994.
(23) Lazard, Gilbert and Peltzer, Louise, Structure de la langue tahitienne, Paris: Peeters, 2000.
(24) Malo, Davida, Ka Moolelo Hawaii, Honolulu : Tha Falk Press, 1987.
(25) Manu-Tahi, Charles Teriiteanuanua, Te parau o te mau vahi faufaa no te mau tupuna i Moorea, Papeete: Les Éditions Veia Rai, 2005.
(26) Milner, G. B., Samoan Dictionary, London : Oxford University Press, 1966.
(27) Mookini, Esther T., O na holoholona wawae eha o ka Lama Hawaii, Honolulu: Bamboo Ridge Press, 1984.
(28) Mosel, Ulrike and Even Hovdhaugen, Samoan Reference Grammar, Oslo: Scandinavian University Press, 1992.
(29) Moyle, Richard, Fagogo. Auckland: Auckland University Press, 1981.
(30) Musée de Tahiti et des îles, E'ori i tō iho tupu, Papeete : Musée de Tahiti et des îles, 2002.
(31) Nakuina, Moses K., Moolelo Hawaii o Pakaa a me KuaPakaa, privately printed, 1902.
(32) Oda, Masahiro, Samoan, Asian and African Grammatical Manual 16b, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 1976.
(33) Pawley, Andrew, The relationship of Polynesian outlier languages, Journal of Polynesian Society, vol.76, 1967, p259-296 .
(34) Pratt, George, Pratt’s Grammar and dictionary of the Samoan language, Apia: Malua Printing Press, 1977.
(35) Pukui, Mary K. and Elbert, Samuel H., Hawaiian Dictionary revised and enlarged edition, Honolulu: University of Hawaii Press, 1982.
(36) Saura, Bruno, Pouvanaa a Oopa, Papeete: Au vent des iles, 1997.
(37) Saura, Bruno et Hiriata Millaud, ligné royale des Tama-toa de Ra'iatea, Papeete : Ministère de la culture de Polynésie française, 2001.
(38) Samoa Observer, online newspaper, Apia, 2016.{http://www.samoaobserver.ws/en/02_04_2016/Samoana/4456/ Manatu-o-le-Fa’atonu---Ua-o’o-i-le-taimi.htm 最終アクセス 2018 年 7 月 7 日}
(39) Shionoya, Toru, Syntactic Properties of Samoan Numerals, Gengo Kenkyuu, no. 97, 1990, p18-43.
(40) Sio, Gatoloaifaana P., Tapasa o folauga i aso afa, Apia: U.S.P Center, 1984.
(41) Steubel, C. and Brother Herman, Tala o le vavau, Auckland: Polynesian Press, 1987.
(42) Sylvain, Teva, 19 fables de La Fontaine en tahitien, Papeete: Pacific Promotion Tahiti, 2008.
(43) The American Bible Society. Baibala hemolele, New York: The American Bible Society, 1993.
(44) The Bible Society in the South pacific, Te parau a te Atua, Suva: The Bible Society in the South pacific, 1997.

(45) The Bible Society in the South pacific, O le tusi paia, Suva: The Bible Society in the South pacific, 1984.
(46) The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Te mau Haapiiraa a te mau Peresideni o te Ekalesia Howard W. Hunter, online site, 2015. {https://www.lds.org/manual/teachings-of-presidents-of-the-church-howard-w-hunter?lang=tah 最終アクセス　2018 年 7 月 7 日}
(47) Wahlroos, Sven, English-Tahitian Tahitian-English dictionary, Honolulu: University of Hawaii Press, 2002.